

# 当日資料

つながれ笑顔  
和歌山とラオス



令和元年11月3日 日曜日

場所：5年A組教室

時間：10：10～10：55

研究協議：5年A組教室

11：10～12：30

授業者

矢出 大介

日時：令和元年 11 月 3 日（日）第 2 校時（10：10～10：55）

対象：第 5 学年 A 組 28 人

場所：5 年 A 組教室

本時の主張点	学習履歴に可視化により、これまでに学んだ知識を想起することを促し、更にグループを中心に自分たちの考えを話し合うことで、考えを再構成しながら探究的な学びを実現していくであろう。
--------	---

### 1. 本時の構想と学習課題について

前時までに、子どもたちは、多くの人と出会いながら環境問題や日本と発展途上国の生活の違いや様々なことがつながっていることを学んできた。本時ではその子どもたちが、「環境問題と貧困問題」を解決しなければいけない問題と捉え、その問題の解決策を吟味する。本時に至るまで子どもたちは、多面的に環境について学び、ラオス支援している宍戸先生と出会ってきた。また、残食が多いことを知った子供たちは学校全体の残食 0 プロジェクトを行っている。本時においては、「自分たちが行動することで何かできるかもしれない」というこれまでの経験、そして思いが学びの原動力になるだろう。「5A みんなで地球環境とラオスの子供たちを守るベストな活動は何だろうか。」という学習課題を提案し、話し合うことで、考えを再構成しながら探究的な学びを実現していくであろう。

### 2. 本時における探究的な学びと省察性の働き

ラオスに井戸を作るためにまずは自分たちにできることを実践し、自分たちの思いを伝え、仲間を増やしていく方法を探ってきた。これまでの学びを生かしながら、「仲間と互いに意見や考えを交流し合い、協働する中で、地球環境とラオスの子供たちを守るベストな活動について自分たちの考えを再構成していくこと」が本時における探究的な学びであると考え。本時においては、互いの考えを交流し合う中で考えの違いが明らかになる場面で省察性が働くと考える。考えの違いに気づくことで、再度自分の考えを見つめ、より多角的に考えてほしい。それにより、自分たちの生活とのつながりを考え、子どもたちの探究的な質を高めることを期待している。

### 3. 本時で活用・発揮したいこれまでの学び

子どもたちは、特別活動において「他人のために働くことの大切さ」を、道徳において「世界の貧困地域で働く人の思い」について学んできている。また、社会科での食料生産や様々な土地の暮らしと CHANGE の学びをつないできた。本単元においては、人間・土・水・森などは互いにつながっていることや日本が便利に生活することで発展途上国の人たちは苦しんでいる、それと同時にその人たちの生活をより良くしようとしている人たちもいることを学んでいる。それらの知識を活用・発揮しながら、一人ひとりの見方・考え方に基づき「ラオスに本当に井戸が必要かどうか」を話し合い、考えを再構成しながら、学級の仲間と協働して自分たちが納得できる答えをつくっていく姿を期待している。

4. 本時の目標

地球環境とラオスの子供たちを守るベストな活動について個々の見方やこれまでの学びを活用・発揮したりしながら、自分たちにできることを多角的に考えることができる。(思・判・表)

5. 本時の展開

学習活動と予想される子どもの反応	□評価 ・手立て
<p>1. 学びを見通す。(問題の把握, 解決の見通し)</p> <p>2. 本時の学習課題についての確認し、各々の考えを表出する。</p> <p style="text-align: right; color: white; background-color: #4a90e2; padding: 2px;">考えの可視化</p> <p>5A みんなで地球環境とラオスの子供たちを守るベストな活動は何だろうか。</p> <p style="text-align: right; color: white; background-color: #4a90e2; padding: 2px;">再構成</p> <p>3. 表出した考えを全体で吟味し、再構成する。 グループで話し合い、その後全体で話し合う。 (予想される子どもの反応)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ペットボトルのリサイクル</span> プラゴミ問題も解決できるし、多くの場所で行っている</p> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">牛乳パックのリサイクル</span> 給食の牛乳パック学校で協力してもらえる。</p> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">ペットボトルキャップのリサイクル</span> 荷物にならないから低学年にも協力してもらえる。</p> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">古紙のリサイクル</span> 学校のみんに協力してもらえる</p> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">プルタブのリサイクル</span></p> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">アルミ缶のリサイクル</span> 集めているのをよく見かける</p> </div> <p style="text-align: right; color: white; background-color: #4a90e2; padding: 2px;">振り返り</p> <p>4. 学びを振り返り、次時の活動を見通す。 (自分の見方・考え方が変化できたことを中心に振り返りを書く。)</p>	<p>□評価 ・手立て</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめに本時のゴールを確認し、見通しをもたせる。</li> <li>・各々の考えなどを表出できるようにする。</li> <li>・多角的な見方ができるような考えや資料を教師が用意しておく。</li> <li>・表出された考えを構造的に板書にまとめることで、再構成できるようにする。</li> <li>・学びを関連付け、総合し、それらを可視化するために、考えの要点を明らかにしながらXチャートにまとめていく。</li> </ul> <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  </div> <p>(子ども1人ひとりにはクラゲチャートに考えを整理しておく。)</p> <p><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">思</span>これまでの学びを活用・発揮しながら、赤間を増やすために必要なことを多角的に考えることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・時間があれば、次時への見通しを持たせるために、これから「どんなことをすればいいのか」と問いかける。</li> <li>・できたことを中心に振り返り、価値付けながら本時のまとめをする。</li> </ul>

本実践の主張点	世界の問題についての知識・技能を身に付け、探究のプロセスを教科・領域をつなげたカリキュラム・デザインをすることで主体的に学ぶ力が育成される。
---------	--

1. 単元名 つながれ笑顔 和歌山とラオス
2. 5年A組の子ども

クラスをより良くしたいと考え、多くの子どもが休憩時間も自主的に会社活動（係活動）を意欲的に行う。また、朝の会のスピーチでは、自分たちで話し合うことを楽しみながら取り組むことができている。その反面、「対象・他者・自己」との対話をしっかりしながら学びを深めることができない子どももいる。そのため、CHANGEにおいて「ひと・もの・こと」との出会いに喜びを感じながら学んでいく経験や、インドネシアの森林問題を政府や消費者などの様々な立場で話し合いながら、お互いのつながりを考えながら多面的に考えを伝え合うようにしてきた。

3. 何ができるようになるか

探究力	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 発展途上国で活動していた多くの人との対話を通して、探究的な見方・考え方を働かせながら、ラオスの国の人々の生活と自分の生活を比較し、考える力</li> <li>・ 発展途上国の人々の抱えている問題の解決に向けて、探究的な見方・考え方を働かせながら、自分たちにできることを考え、発信する力</li> </ul>
省察性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 探究的（多面的）な見方・考え方を働かせながら、学習を見通したり、振り返ったりする中で、どうすれば問題を解決できるのか考え、修正・改善する力</li> </ul>

4. 何を学ぶのか

① 単元の目標

探究的な見方・考え方を働かせながら、ラオスの国の人々の生活と自分の生活を比較し、調査することを通して、自分たちとラオスの人々の生活がつながっていることがわかる。また、ラオスが抱えている水問題の解決に向けて、自分たちにできることを考え、発信することをとおして、自己有感を高める態度を養うことができる。

② 教材の価値

日本は世界で数少ない水道の水が飲める国である。子どもたちは、安全な水は飲めることが当たり前だと考えているが、安全な水の確保が難しい国も多い。先進国が豊かな生活をする一方で、貧しい暮らしを強いられている国もある。日本と他の国の条件を比較したり、水の確保という視点を通して世界を多面的に見たりすることで、物事の背景を考える力を身に付けることができる。

③学年間・教科間のつながり

社会科「暖かい土地の暮らし」「これからの食料生産」、道徳「もし世界が100人の村だったら」で学んだ、世界の現状などが本単元の問題解決に知識を補完するかたちで活用される。本単元で探究的に学んだことを表現・発信する段階で、国語科「グラフや表を用いて書こう」「分かりやすく伝える」図工科の「エコメッセージ絵画」とつなげることで、発信する力を高めていきたい。

5. どのように学ぶのか

①働かせたい思考スキル

- くらべる    つなげる    まとめる    広げる    予想する    見方を変える

②学習内容を理解し、資質・能力を育成するための学習過程

<p>単元計画（全20時間） 本時20/30</p> <p><b>第一次 世界と日本の現状を知る 9</b></p> <p>生き物と環境の関わり 森林問題と私たちの生活とのかかわり 森林問題をめぐる人々のかかわり 環境問題と私たちとのかかわり</p> <p><b>第二次 日本と世界の水問題を知る 6</b></p> <p>環境アドバイザーに水問題を教えてもらおう 自分たちに何ができるか考える SDGs ゲームで世界の問題を知ろう</p> <p><b>第三次 ラオスのためにできることを考える 7</b></p> <p>安戸先生のラオスへの思いを聞く ラオスにできることは何か考える（本時）</p> <p><b>第四次 自分たちの考えと成果を発信する 8</b></p> <p>自分たちの考えと成果を発信する</p>	<p>単元における授業づくりのしかけ</p> <p>探究力を育む</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>世界の現状を知る人と出会ったり、SDGs ゲームをしたりするなどして学習を楽しみながら、世界の現状を知っていくようにする。</li> <li>井戸づくりのために必要な資金を集めるために必要なことを仲間と調べることで協働する姿を促す。</li> <li>学びの履歴を可視化することで、知識の活用を促す。</li> </ul> <p>省察性を育む</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分たちの思いを大切にすることで、問題解決ができるかを吟味する。</li> <li>目指すゴールを意識しながら学習をすることで、今の自分の学びが良いかを考えながら振り返る。</li> </ul>
---	--

6. 何が身に付いたか

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本や世界の現状を知り、支援活動の意味や価値が分かる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本や世界の現状について、調べたりしながら、ラオスのみんなが喜んでくれる方法を表現することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>発展途上国の人々の思いや生活の様子、異なる立場や考えを尊重しながら、自分たちのできることを実践しようとする。</li> </ul>

【各教科・領域において習得した知識(内容知・方法知・体験知)の活用・発揮が促され、互いの探究のプロセスが充実していくイメージ】



<本校のカリキュラム・デザインの特徴>

- ① 「知識」の活用・発揮に焦点をあてていること
  - ② 「知識」が活用・発揮されることで、関連し合う教科等の探究のプロセス（課題設定、情報収集）が充実し合うようデザインしていること
- ※探究のプロセスは、課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現の4つで考えていますが、本校においては、「知識」の活用・発揮によって直接的に充実するのは、課題設定、情報収集のプロセスの2つであると考えています。
- ③ 「知識」には子どもの想いや願い、疑問なども含み、内容知、方法知、体験知などあらゆる知識を想定していること

<表 充実する探究のプロセスと子どもの様子(例)>

充実する探究のプロセス	子どもの様子(例)
課題設定	意欲的になる 自ら課題を設定する 問題意識をもつ など
情報収集	情報が「補完」され、事象にくわしくなる 知識をためる など

## 参考資料

### 単元への思い

なぜ和歌山から遠く離れたラオスの子供たちの支援をすることを考えたのか。それは、昨年度宍戸先生（※1）と出会い、先生の思いに共感し、先生の思いを元に子供たちと学んでいきたいと考えた。

#### ※1 宍戸先生の紹介



36年間、福島県公立学校の教員として勤務。19年間の管理職の経験と道徳教育を中心とした実践を通して、子どもたちの心の教育に力を注いできた。また、東日本大震災を体験し、幼い子供の若い父親・母親の不安に寄り添いながら学び考えたことを通して、日本の教育のさらなる未来のための一提言をしたい。また、退職後、2011年の震災前から取り組んできた、東南アジア(ベトナム・ラオス)の山岳地帯の教育環境に恵まれない子どもたちへの支援・交流活動に身を投じている。毎年20校ほどの学校建築を進めるNPO法人の参与として、現地の子どもたちの輝く瞳から学ぶことをつたえるため、年間100回ほどの出張授業や講演に出かけている。

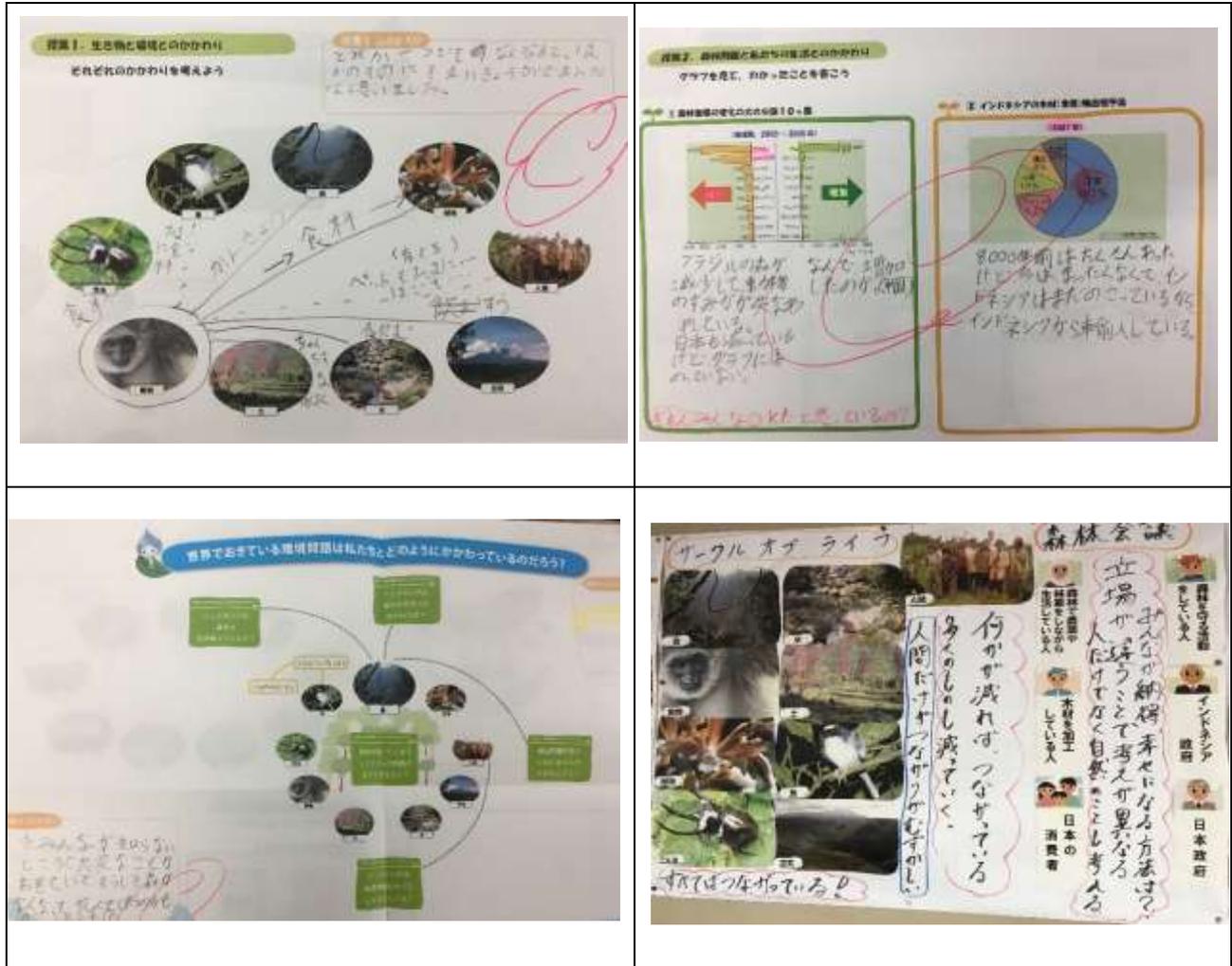
東南アジア(ラオス・ベトナム)の山奥の子どもたちは、恵まれない生活環境や不十分な学校環境でも、瞳を輝かせて学び逞しく生きている。その姿を鏡として、恵まれた環境に生まれ育った日本の子どもたちは、何を学ぶことができるのか。また、それを知った日本の子どもたちが、「人の役に立つ人間にいたい」と立ちあがった姿の紹介などから、これからの日本の学校教育・家庭教育で子どもたちに大切にしたいこととは何かを提案したい。また、子どもたちの祖父母の時代(戦中戦後)と酷似した現地の現状を知ることで、祖父母が辿ってきた道・歴史を知ることにつなげたいと考える。

<https://www.kouenirai.com/profile/8141>

宍戸先生がラオス支援などを行っている理由の1つに、日本の子供がラオス支援をすることで、自己肯定感だけでなく、自己有用感を高め、子供に自己使命感をもつことができると考えている。この考えに触れたことで、私が抱いていた疑問が解消された。それは、発展途上国の子供は目が輝いていて、学びに意欲的だが、日本の子供たちの中には、学びから逃げている子がいる理由は、自己有用感の差なのかもしれないということだ。私は、1年間を通して、子供の自己有用感を高める学びや活動を大切にする計画をした。そこで、子供たちの活動のゴールとしてラオス支援を考えた。しかしながら、小学5年生にとってラオスは遠い国であり、支援する気持ちになることは難しいため、環境問題を入り口にした。環境問題を学ぶ中で、これまで自分が当たり前のようにしていた生活が当たり前でないことを知る。また、自分も知らない間に環境を汚していることを知っていく。そして、そのような環境問題などの改善に取り組む人たちに会っていく。その人たちの出会いから、大きく次の2点を学びました。①「まずは自分が活動していくことが大切」②「自分の考えを理解して、応援してくれる人を増やすことが大切」その中で、宍戸先生と出会ったことで、子供たちは遠く離れたラオスの子供たちのために何かできることはないか考えていった。環境や世界の状況についての知識を得ることを土台として、自分たちが行動し、応援してくれる人が増えたその先に実社会に貢献できたと実感できる学びになることを意識した。

単元の様子

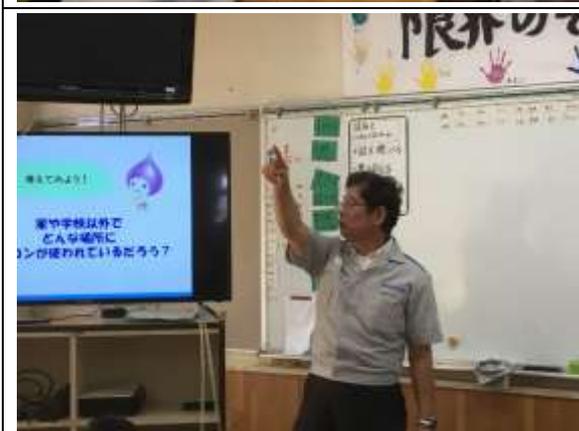
自然環境のつながりを感じる D 企業の環境教育プログラム



この学習と 4 年生社会科「ごみのしまつと活用」「命とくらしをささえる水」で学んだゴミ処理や飲料水の確保が計画的、協力的に進められていることとつなげて考えることができた。子供たちは、生き物と環境の関連性について考え、環境の変化が生き物に深く影響を及ぼしていることに気づくことができた。

子供たちの考えとしては、水が半分になると、土や森林など他の多くの環境も半分になっていくのではないかと。水だけでなく多くの自然環境は 1 つが半分になると他もほとんど半分になる。人口が減るとどうなるのかについては、他の要因とは少し異なると感じていた。人口が減っていくと、逆に森林などは増えるかもしれない。動物に関しては、殺している人も保護している人もいるので、減るのか増えるのかどちらとも言えない。

また、子供たちは、森林問題と私たちの生活との関連性について、グラフや調査資料などの読み取り、自分なりの考えを表現していた。自分たちが思っていたよりも森林が減っていることや、日本には森林が多いにも関わらず、木材をたくさん輸入していることを知った。



「インドネシアの森林問題をめぐって、人々はどのような思いをもっているのだろう」という課題について考えた。森林会議ロールロールプレイを通じて、森林問題をめぐってさまざまな立場の人たちが存在し、それぞれに主張が異なることを理解していた。そして、立場によって考えが異なるので、簡単に1つの正解を見つけることができない。みんなが納得できる答えを見つけることは、難しいけど考えていくべきだと感じていた。

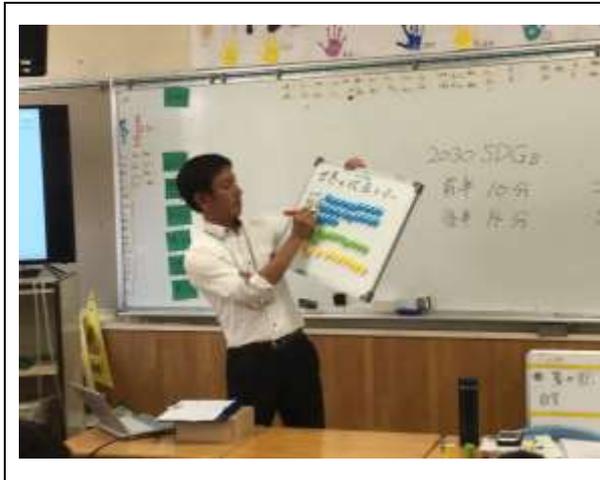
企業Dの方に来てもらった時には、1人ひとりが自分のできることを行動していくことが大切であることや、少しのことでもまずはやってみることが大切だと学んでいた。

### 平井先生との学び



世界の水のわずか 0.01%しか使える水がなく、その 70%が農業用に使われていること。そして、日本は、たくさんの食べ物を輸入しているので、実は多くの水を海外から輸入している（バーチャルウォーター）ことを知る。世界では、安心・安全な水がなくて困っている人が多くいることを知る。

子供たちは、もっと水を大切にしないといけないし、残食はしてはいけないと伝え合っていた。



SDGs カードゲームを体験したことで、子供たちは世界の国々にもつながりがあることを感じていた。そして、自分たちの国のことばかり考えていると経済は良くなるが、世界の自然環境や治安が悪くなることを知った。来てくれた平井先生から自分たちだけががんばるのではなく、協力してくれる味方を増やすことの大切さを教えてもらった。

宍戸先生との出会い



宍戸先生が来てくれ、ラオスの子供たちの様子を伝えてくれた。ラオスの山岳に住む人たちは、安心・安全な水を飲むことが難しく、学校に行くことも難しいと知る。しかし、子供たちは毎日を精一杯生きていることや自分たちが感じることでできない幸せを感じているのでは、自分達よりも不幸せとは限らないと感じていた。しかし、生まれた子供の約 60%が亡くなってしまいう現実はあってはいけない当たり前だと考え、何とかしたいと考えるようになっていた。講演の後、宍戸先生が 5 年 A 組教室に来てくれ

て、子供たちに「自分たちが何か行動することでラオスの支援をしてくれることはうれしい」と伝えてくれた。

#### 子供たちの活動



これまでの学習をつなげながら、子供たちは、自分にできること「マイチャレンジ」を行動しながら、5Aチャレンジとして「残食0プロジェクト」を考えた。これは、社会科で学んだお米作りでは、お米の食べる量が減少してきていることや農家が減ってきていること、そしてお米をたくさん食べていくことが輸入を減らすことにもつながることを学んでいた。しかし、本校の給食で最も残食が多いのがお米であり、1日15kg近くになることを知ったことで、まずはこの問題を解決したいと考えた。まずは、5Aが当たり前のように残食0であり、その上で他のクラスに残食を減らすことの大切さを伝えたいということになった。実際に残食チェックも行った。自分たちは話をした後に、残食が減ったことをとても喜んでた。特に単式の5年生クラスが残食0になっていたことを喜んでた。また、栄養教諭や調理員さんにも感謝されたのも励みになっている。

今は、環境のこともラオスの子供も救える方法はないかと考えている。環境を守ることを重視している子どもと今すぐ命を守るために募金したい子どもに分かれている。

本時の願い

学習課題「5A みんなで地球環境とラオスの子供たちを守れるベストな活動は何だろうか」について、環境も守りながらラオスの子供を助けたいと考えている子供と牛乳パックなどを集めていてもとてもラオスに井戸を掘るようなお金は集まらないから早く募金して少しでも早く井戸を掘って命を助けたいと考えている子供に分かれている。

子供たちが、お互いの考えを話し合う時に、教師が考えを整理していく必要がある。教師が構造的な板書をし、考えを整理することで、子供たちがどちらも大切にしたい考えを生み出すことを期待している。

どちらの立場の子供たちも自分の考えと比べながら違う考えを聞くことで、考えを再構成できる話し合いになることを願っている。そのためにこれまでの学びをつなげながら話し合ったり、考えたりする必要がある。

子供たちが、再構成できたことで、自分たちががんばることで、周りの人にも協力してもらえる募金活動を計画することができる。この経験が、子供たちの自己肯定感と自己有用感を高めてくれることを願っている。